

# 計画からマネジメントへ

長年に及ぶ神戸市真野地区のまちづくりへの支援や京都市長選への出馬など、行動する学者として知られる広原盛明さん。まちづくりや都市計画に、豊かな批判精神で鋭い発言を続けてきた。一方、京都市を中心とする地域の状況にも大きな変化が起こりつつある。開発中心の都市計画から地域資源を重視するまちづくりへと市民意識が転換し、京町家の町並みを重視する新景観政策が施行されるなど、まちづくり行政の変革期を迎えている。広原さんは、この底流にある地域社会の情勢を分析し、その動向を無視した現在の都市計画改革論議に警告を発する。

## 京都の変貌

西村◎広原さんは京都市長選にも出馬されるなど、地域のまちづくりに熱心に取り組まれてきましたね。

広原◎この数年間で京都の世論環境はかなり変化したと思うんです。市民サイドから繰り返し提起されてきた規制緩和によるマンション開発に対するダウンゾーニングなど、どういう契機かは知らないけれども、意識の劇的変化がここ数年間に起こった。

西村◎それは開発志向から、町並み

環境を考慮するようになったということですか？

広原◎そうですね。バブルの後遺症は地域によってかなり差があったと思うんですけど、京都はかなり深刻だったと思うんです。地価の上昇率と下落率が全国でトップなんです。これは京都の土地が投機の対象になったということで、その後遺症があくどいマンション建設に結びついたことから、京都の資産価値を損なうと地元の資産家や経営者達が認識したと聞いています。彼らが参加した京都商工会議所における議論

で、「京都ブランド」を持たないと世界市場へ乗り出していくのは難しいという指摘がだされたのです。

大阪の場合は東京に進出してから海外に出るが、京都の場合は直接に世界へ進出したい。そのときに、自分たちの商品や技術のバックボーンとして「京都ブランド」を確立したい。外来資本の投機対象になって京都の価値を下落させるのは非常にまずいんじゃないか、という判断がバブル崩壊後に急速に出てきたのです。今までの開発反対は市民サイドからだけだったのが、企業の経営者側から

の意見も加わって急激な変化が可能になったということです。

西村◎広い意味でのエリア・マネジメントのようなものですね。エリアの価値が下落すると、企業の価値も下がってしまうという。

広原◎だから、観光産業ということだけじゃあなくて、全体の企業が世界市場に進出する可能性に気づいたということではないですか。

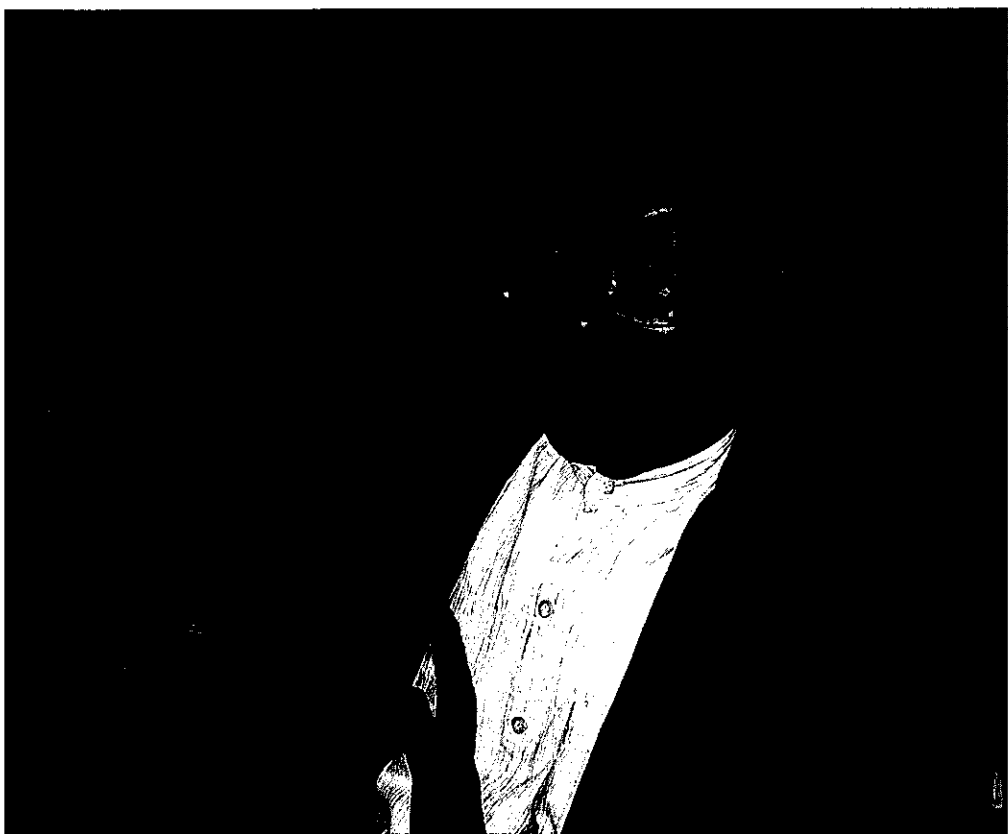
西村◎規制強化を甘受しても京都ブランドの確立が大事だと思つたということでしょうか？

広原◎それはね、京都の経済界を主導するハイテク関連の製造業にとって、都市計画の規制強化はあまり関係ないからなんです。

西村◎それが3年前の京都市における新景観政策を支えたということでは

## ●広原盛明氏

1938年中国東北(旧満洲)ハルビン市生まれ。京都大学工学部建築学科卒業、京都大学大学院工学研究科博士課程退学、京都大学助手・講師を経て、1971年京都府立大学助教授、1985年教授、1992～98年学長、2000年から龍谷大学法学部教授、現在は同大学研究フェロー



すね。京都新聞が世論調査をしたら8割が賛成してくれたというのはいきなりですね。これまでは、だいたい賛成・反対の意見が拮抗する。住民は、資産保有者でもありませんから、所有権を制限する規制強化には反発が生まれて、賛否が拮抗するものですが、京都の場合は賛成が圧倒的多数でしたからね。

広原◎高度成長期には、京都の老舗の旦那衆の夢は、町家をビルに建て替えることだったんです。大阪にも立派な町家が戦後すぐの時期には残っていたんですが、近代化のなかで近代的なビルを持ちたいという気持ちが強かったんです。大阪は経済力があるからビル化が進みましたが、京都の場合は建て替えられなくて残った。だから当時は、古い町家のままの所は、景気が悪いと評判が悪かったんです。景気のいい商家は皆建て替えた。しかし、高度経済成長期から経済のラウンドが回って、バブル期になって建て替えられなかつた所が土地を手放した。それが世論の反発をくつたんです。京都人は開発にうるさいっていわれま

すね。それが町家の建て替えを遅らせた。そのうちにバブルが崩壊して地価が下落する。土地持ち家持ちは、高容積にして開発する道をすすむか、ダウンゾーニングを受け入れて町並みの価値を維持するか、選択を迫られたと思います。そこで、従来の不動産開発では問題があると逡巡していたところに、先ほどのハイテク製造業を中心とした世界進出の話が起きた。だから、あのような転換ができた。

西村◎京都の方向性が定まったわけですね。定着しましたか？

広原◎でも一つ波乱要因があつて、町場の工務店が賛成しなかつたんです。それは町家の建て替えといつても、厳しい制約があるため、彼らは市役所へのデモをやつて反対しましたし、京都新聞にも意見広告を出して運動した結果、京都市は結局妥協したんですね。大規模建築物には厳しくするが、町場の小規模建築物には妥協したので、工務店は賛成に転じた。というのは、マンション建設が抑制されるため、町場の一般住宅の建て替え需要がふえて、自分たち

の商売ができるようになったので  
す。

西村●というのは、ダウンゾーン  
グが必ずしも高密度な都市居住を否  
定しているわけではないんですね。  
低層でも高密度な住み方ができるん  
だという方向に動いていったわけで  
すね。

広原●家族規模が小さくなり、高齢  
化が進んでくると、向こう三軒両隣  
の長屋が一番住みやすいですよ。平  
面移動で、パリアフリーですすね。  
それをなぜ高層マンションに住まな  
くちやあいけないのかという問題が  
あったのを、元に戻したということ  
です。

西村●長屋住まいとなると、プライ  
バシーの考え方も、住まい方も異な  
ってくるから、プランニングに対す  
る考え方も違ってきますね。

広原●京都の場合は。住まいと住み  
方はセットですね。西山外三さんに、  
それは「住み方の礼法」だといわれ  
たけど、京都市で住むには住み方の  
ソフトを持たなければならぬ。  
「見て見ぬふり、聞いて聞かぬふり」  
というのが、住み方の原則なんです。

西村●それは現代の住宅でも同じな  
んですか？

広原●同じだと思えますね。京都の  
稠密な市街地に住むにはそういうた  
マナーやエチケットがないとトラブ  
ルが起ころうと思うんです。その極意  
が火の用心なんです。住むための  
セキュリティですからね。京都の場  
合は、面積あたりの、あるいは一人  
あたりの火災の発生率が他の木造密  
集地域よりも低いですよ。その理由  
はものすごい火の用心に対する注意  
があるわけですよ。火を出したら  
七代経つてもつきあってももらえない  
と言われてますよ。

### 市民と行政の関係

西村●行政と市民の関係は京都の場  
合どうなんでしょうか？ 行政が先  
進的にまちづくりをやるため、市民  
側に主体性が育たないとか。逆に、  
市民が中心となってノウハウも市民  
側に蓄積されている場合とか、両者  
の関係でいろいろタイプがあると  
思うんですけど。

広原●神戸と京都では全く市民のタ  
イプが違います。神戸でね、神戸

市長と商工会議所会頭と神戸大学長

で誰が偉いと聞くと、100人中1

00人が神戸市長というんです。神  
戸の場合は役人が優秀で役人が偉い  
んです。神戸の施策は新しいし、  
リベラルだし、近代主義なんだけど、  
でもそれは民主主義のない近代主義  
でしかない。だから神戸で出て来る  
まちづくりの施策は全部市役所が考  
えるものなんです。市民の意識レベ  
ルはそれほど高くない。対抗できる  
のは真野地区ぐらいでね。市役所は  
その真野地区を市民参加のシヨーウ  
インドとしてうまく使ってる。そこ  
ろが、京都は役人の地位がそんなに  
高くないんです。京都市民は京都市  
役所の局長でもあまり偉いとは思っ  
ていない。神戸は絵に描いたような  
都市計画をどどんやるでしょ。と  
ころが、京都は国の補助事業を持っ  
てきてもやれなかった。役所の権威  
がそれほど高くなかった。ところが  
今、京都の役人に対する評価が高い  
んです。派手な開発はやらないけ  
ど、丁寧なまちづくりをしていると  
いうので、外人にも評判がいい。た  
えばそんな細い路地の奥でもきち

んと舗装しているとか。

しかし、役所でプランをつくって

指導して市民を引っ張るということ  
は難しい。それは住民の合意がない  
とできない。ところが、どこで合意  
をするかが悩ましいところなので  
す。元学区以来の強固な自治組織が  
ありますからね。これはすさまじい  
組織でね。革新精力が束になっても  
崩せない保守の牙城です。町内会が  
あるでしょ。さらに町内会連合会が  
あって、地域の核になっているんで  
すね。そこに体育振興会、青少年補  
導委員会、地域女性会、老人会、社  
会福祉協議会など各種団体が結び付  
いて、今はやりの包括的自治組織で、  
ぜんぶ自治会を通さないとまちづく  
りにはできない仕組みになっている。

西村●今、地域組織を作りたいと各  
地でやっているけど、京都には既に  
以前からできていたというわけでは  
ね。  
広原●壊したいと思っても、壊せな  
い。さらに地域消防団がものすごい  
密度でできている。火災から地域を  
守るのは、近代消防だけじゃないん  
です。

●西村幸夫氏  
東京大学先端科学技術研究センター教授。1952年福岡市生まれ。



西村●保守的な組織である一方で、  
コミュニティを安定させるプラスの  
効果もある。どういう風に町内会を  
評価しますか？

広原●革新団体が地域を変えていく  
という時に、町内会をどうするかと  
いう戦術がもてないですね。いまま  
では、強固な地域組織の外側に運動  
団体をつくったわけです。行政と直  
接交渉して一定の成果を上げた。地  
域組織と一緒に運動するということ  
にはならない。急激な変化にはもの  
すごい抵抗を見せる組織ですから。  
西村●だからこそ、高層マンション  
が建たない町並みを守るには大きな  
役割を果たしてきたわけですね。

編集●それはかつての京町衆の自治  
を受け継いでいるわけですから、そ  
れとの連携は大切ですよ。

西村●関西の中では京都は特殊なん  
ですか？ ほかに近代化されないと  
残っている地域があるのでしょうか？

広原●だいたい関西はどこでも同じ  
だと思えますよ。ただし、行政との  
力関係でね、ハイお受けしますと動  
くかどうかですね。京都のようにプ

ライドが高い町はなかなか行政のい  
うとおりにはならない。だけど下手  
から持つてこられると弱い。京都市  
は下手からいくんです。基本的に  
は行政の方針に乗せますが、ただ時  
間がかかる。そうすると、開発のス  
ピードについて行けない。

西村●そうすると開発のスピードが  
速い場合には対応できないけど、そ  
うでない今日のような時代には大丈  
夫なわけですね。  
広原●今後、開発のスピードが落ち  
て、漸進的な方法が採用されるよう  
になると、そういう手法にはなじむ  
地域ですね。

### 小学校とコミュニティ

西村●現在、全国の地方都市の中心  
市街地における人口減少がひどいで  
すが、京都はその辺はどうなんで  
すか？ きちんと対応できてるわけ  
ですね。

広原●京都市でも、小学校の統廃合  
が進んでいますね。でも、その統廃  
するときの方法に特徴があつて、人  
気のある学校にする。たとえば、小  
中一貫校のような。

西村○教育で人を引きつけるようなことですか？

広原○教育政策と都市政策が結びついている。市長が全部、出身が教育委員会ですよ。教育を材料にして都市の空洞化を抑えるというのは、なかなか効果があるんです。

西村○もともと京都は学区をつくったときから市民の浄財で立派な小学校をつくっていますよね。

広原○教育に対する価値観が高いんです。だから、学生が大事にされる。大阪に調査に行くと、こんな忙しい時にと門前払いですけど、京都では学生さんが来たから協力してあげないといけませんねと対応してくれる。教員や学生、大学に対してもすごく親切なんです。だからまちづくりで学校をコアにして再生するのは、非常に巧妙であり、的を得ている。

西村○東京近郊でも、古い町並みじゃないですが、幕張ベイタウンの開発では実験的な小中学校をつくってオープンスクールを取り入れて、斬新な建物に優秀な教員を集めて実験校にしたんですね。それが人気でこ

こに住みたいという住民が集まっているんですね。

広原○教育による対応が都心の空洞化に一番効果的だと思いましたが、人が住んで子供が学校に通うようになったら、地域は生き生きとしますよ。

西村○通学路を皆でコモنزのように皆で支えるとかね、通学路は子供が毎日行ったり来たりするから小さい頃のふるさとの景色はそこから生まれるように周りできちんと対処するとか、それによってコモنزを育てていくベースになると思うんですよ。

広原○それは現代のインフラですね。

西村○そういうのが大きな核になって次のまちづくりがなされる。

広原○だから飲み屋での談議ですね、京都の学閥は小学校間なんです。小学校から同じ地区に住み続けていて、よそに出て行かない。東山区の職人町に行ったらそのようなコミュニティがすごいですよ。

西村○東京だとね、それがあるのは例えば日本橋室町あたりで、やっ

や場（青物市場）のあったところで、道が狭く建て込んでいて安定したコミュニティがあるんですね。そこはまだ、お年寄りになっても同級生同士がつきあっているんですが、他はあまり聞かないですね。

広原○京都には全的にそんなつきあいがありませんからね。ただ、一時期郊外開発ブームで子供達がいなくなり、地蔵盆の時に子ども達を呼び寄せるということも起こっているんですが、小学校のコミュニティはすごいですね。本当にびっくりしています。だから、地縁血縁で結びついてくる京都で選挙に出るといのは大変ですね。戦後の変革期に東京から来た嵯川虎三さんが京都府知事になりましたが、京都市長は高山義三さんをはじめ、ずっと京都の人ですね。

### 地域タイプに応じた自治

西村○そうすると、日本の中でそうした京都の特質をどうとらえればいいですか？ある種のモデルになり得るのか、それともここは特殊なのでしょうか。

広原○特殊ということじゃあなく

て、一つのタイプだと思えます。かなり洗練度の高い都市の一つのタイプです。ほかにも東京のようなタイプとか、いろいろあると思いますよ。

西村○ということは、現在、地域主権といわれていますが、一色で仕組みをつくったり権限委譲するよりも、地域のタイプに応じたような自治（ガバナンス）のあり方があるということなんですかね。

広原○地域主権に関するものをいくつか読んでみたんです。制度設計に皆さんの関心があるようですが、問題はどこまで制度設計するのかなんです。計画でいえば、計画しすぎるといふことにも弊害があるでしょう。だから、あまり計画しすぎない方がいい。多くの理想は「計画なきプランニング」で、みんなが自然に住むこと自体が都市の秩序そのものを維持できるような状態が好ましい。法律や制度による規制ではなく人々のルールやマナーなど都市の文化的な生活様式自体が都市を制御していくというか、それが理想だと思います。それがないからある程度制度化によって括らなければいけ

京都東山の瓢亭周辺の風景



い。でも括るのにも程度や限度があるんです。いったいどこまで括るんですか？皆括ることに必死になってアイデア出している。

西村○多分、東京で議論していると、コミュニティの前提が隠れちゃうんですよ。そもそもコミュニティがないという前提で、かたちをつくっていくのかと考えると、もうじゃやないでしようかね。

広原○確かに肝心のところは景観規制しなければ、開発による景観の破壊は止まらなかったわけだし、法律で規制しなければならぬということとは法治国家である以上当然のことなんですけれども、地域によってコモンのレベルが違うんだから、京都ルールがあつて、東京ルールがあつてもいい。そうすると、地域によってどこまで括るのということ、また民主主義の問題として行政が一律に上からかぶせていいのかという問題が必ず起こってくる。

西村○まちづくりに関連している人たちが、多様なコミュニティのあり方が地域によって異なるということをあまりイメージしていないかもしれ

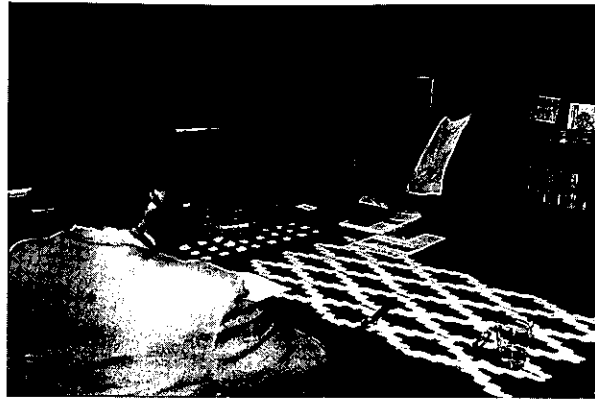
ません。自分が育ったところと今いるところと2カ所だけですね。様々な地域に入ってみれば一律じゃないってことは分かりますよ。多様な地域への関心が薄れてきているんじゃないか。その結果が、過度な制度論にいくとか、法律の仕組み論にいくとかになってしまふのかもしれないですね。欧米の場合も、日本から比べるとコミュニティの移動が激しいところがあるから、とくにアメリカはそうですね、そうした欧米での議論に過度に反応しすぎたところがあるのかなという感じもしますね。

広原○ぼくらの時代もフィールドワークをやったし、今の若い人たちも参加のまちづくりで地域に関わる機会が多いから、多様性について決して等閑視しているわけではないと思っただけで、そのフィールド・レポートを見ると最終的な結論を一般的な制度設計論に持って行くのね。従来の都市計画制度の下では作れないような計画を立案するためには計画の制度を変えなければならぬという意識が強いんだと思うんです

ね。  
西村◎今の時期、都市計画制度の抜本的見直しなど、制度を変える議論が多いわけですね。制度的に不備な面を大きく改正する必要があるところとか、都市と農村の制度は違つたままでいいのとか、大きな問題に直面しているところがあるんですね。

広原◎ほくもそうだと思いますけれど、地域の現実をみたときに制度だ

対談風景(場所・学芸出版社)



けをいじつて果たしてうまくいくのかなと思いますね。

西村◎ワークシヨップなどが盛んになっていて、近い将来に討議型の合意形成が可能になるんじゃないかという希望的観測が若い人たちにはあるんだと思うんですね。それは東京だったら可能な特殊なケースで、地域では今はそんなことというけど、これまで何をしてきたと昔を知っている地元の人々は意見のみでは賛同してくれませんか。討論だけでなく、全人格的にいかなないと地域に受け入れてもらえない、という問題が地域社会の中にあると思うんですね。こうした場面で透明で民主的な議論ができれば自ずと結論に向かっている、それが民主主義を深めていくんだという暗黙の希望的観測があると思うんですね。それが今日おっしゃったような京都のコミュニティの現実からすると違いますよね。

### 社会状況と制度論

広原◎ほくは制度設計論も有効な局面があると思うんだけど、問題の掘り下げが足りないんじゃないか

な。政策とか制度は問題を解決するためのツールですからね、この問題にはこのツールを使えば解決する

いうように、問題と制度と成果は三位一体で評価すべきです。ところが、制度を変えれば問題が解決するみたいな、制度から問題を見ているみたいな逆立ちの議論が非常に強いと感じているんです。問題は、それほど簡単じゃないですよ。特に、現在地方都市が抱えている問題だとか、市町村の抱えている問題は非常に深刻ですよ。

西村◎それは制度に問題があると思っっているわけですよ。もつと奥に問題があると、長いコミットメントがないとなかなかそこに到達できない。手早い問題解決が求められている結果、長期の定点的なアプローチが希薄になっている面があるのかもしれないですね。

広原◎都市計画学会の基本的な体質がそういうところに焦点をさぼるばかりだから、もつと深いところは他の学会がやってという役割分担はあると思うんですけど、これから予測される地域社会の状況は、これだけ

の議論では対応できないんじゃないかな、と思いますね。

編集◎研究者や専門家が行政のために知識や技術を提供するだけじゃあなくて、住民を支援する体制を形成すれば地域の実情に沿った深い分析や提案が可能になるんじゃないですか？

広原◎それはしんどいですね。編集◎でも、広原さんは神戸の真野地区でそれをやられたわけじゃないんですか？

広原◎あそこを突破口としようと思っただけだから。しかし今、ひとつの突破口だけでは全体の局面展開は図れないね。大きな時代の転換期にきているから。

西村◎全般的な話となると制度論になっちゃうんですね。突破口を深掘りしていくとそこに見えてくるものもありますよね。特殊にアプローチすることと普遍的に問題を見通すことが両方できないといけないと思いますけどね。前者がないと根無し草になっちゃうし、後者がないと現場それだけになってしまつたら、双方からのアプローチで住民の声をよ

り制度に反映することが必要だと思っただけですね。

広原◎ほくは真野のまちづくりをやっているとき、同時にあのとき起こったアドボカシー・プランニングを知っていたら、もつと建設的なことができたろうけれど、そういうのがアメリカで生まれていることを知らなくて、真野だけやっているとにもならなかったという反省は持っています。しかしその一方、制度設計論が有効に機能するかどうかは、社会状況を抑えないとユートピア論になっちゃうわけね。地域主権論というのは、美しいけれど、ここに沖縄の都市計画を持ってきたら地域主権なんて空理空論になっちゃうでしょう。名護市の都市計画で地域主権といつてどうなるんですか？

そういう問題を考慮しないで、あたかも地域主権というユートピア的状况が来ましたよ、と議論が流れていくのはユートピア計画主義じゃないかと思えます。

西村◎沖縄だけでなく、権限が地方に下りてきても、地方にアイデアはあるかと問われますね。今までは、

国による補助メニューがあるからそれへの選択ができたけれども、全く政策メニューがなくて一括補助金によつて自立して自分たちでやれるかとか、政治家の利益誘導を排除できるかとなると、対応できる場所もあるだろうけれど、やれないところも多いと思うんですね。そういう足腰を強くするような対策を同時にしていかなないと、本当に危ういという感じがしますよね。

### 無力化する都市計画と地域マネジメント

広原◎もうひとつ、これからの時代に都市計画という概念がどれだけ有効性を持っているのか、ということを考えなければいけない。計画に対するオルタナティブな概念としてマネジメントという言葉が出てきて、都市計画に対し地域マネジメントが

あるよといわれている。計画という概念がものすごく有効であった時代があると思うんですね。都市が膨張してそれをコントロールしないといけない。しかし、都市が縮小し、衰退して、まだら状に荒廃していく。そのような時代に計画という概念で全体を覆うような制度設計論は果たして有効なのか。都市計画の時代が終わつて次の新しい概念を考えなくてはいけないのではないかと思います。

西村◎まさにその通りだと思えます。都市計画は変化があるから必要なんです。停滞しているときに計画といつても意味がない。だからいろんな計画ツールの意味が問われていくわけですよ。たとえば、用途地域制度がありますけど、用途地帯をかけるのだから変化するという前提で誘導するわけで、何も変わらなければ用途地域かけたって意味がないわけですよ。容積率があつて、それを高低することで効果があるならいいけど、それは容積率アップへの開発圧力があるから、政策的措置によるメリットが生まれるわけですよ。

変化がないということだと、政策的な誘導によつて地域は動かないわけですよ。今の都市計画のツールはすべて何らかの変化があるということが前提なんです。停滞・縮小の時代に何が有効かといえば地域マネジメントによつて少しずつ地域を魅力的にして他の地域との差別化を図つていくとか、積極的に地域を動かすようなこれまでとは全く違ったツールじゃないかと思えます。その意味で言うと、基本的に大きく変えないといけないんですよ。

広原◎いま流行のコンパクトシティ論があるでしょ。国の審議会とかの議論を見ていると、コンパクトにするために中心市街地の線引きしてくださいというけれど、膨張するときには線引きが有効だけれど、今あるものを線引きして外れた地域にのたれ死にしろつていうのは、計画とは言えないですよ。だから、ほくは近代都市計画がセットにしてきた経済と都市と人口の成長を背景として都市計画という概念が出、それによつて制度化され、専門家も活動してき

たという時代的な有効性は認めるけれども、そのコンセプトや手法で、これからいくら制度設計やっても機能しないんじゃないのか。地域や都市の問題の質が違つてる。成長型と衰退型の問題はまるつきり違うのに、衰退型の問題に対しても成長型の計画で対応しようとしている、という時代錯誤があるんじゃないですか。これを一番強く感じるんです。

西村○東京はまだ成長してるから、東京で議論すると、従来の議論が当たり前みたいになつちゃう。それが地方都市をみれば全く違う。

広原○だから、こんなのでいいのか。やつても良いけど、役所の仕事が増えるだけで、全く変わらないよね。

西村○今都市計画制度改革で採用しようとしている住民意見の導入も、みんなが知り合いの中で本音を本当に言うのかということがあるんですよね。討議民主主義の前提は個人がばらばらだということなんです。ばらばらだから多数決だつて意味があるわけですよ。ところが、ばらばらじゃあない社会、もう少しくつ

ついている社会のなかでの合意の形成の仕方は違つているかもしれないですよ。その意味でも変えていかないとアメリカのように移民が集まつてできた個人社会の論理で多数決により民主主義が育つてくるというのはちよつと違つているんじゃないかと思ひますね。

広原○だから、これまで計画というユニタリーな構造で考えてきたのを、これからは重層的に考えて、1段階目には計画は必要だとしても、2段階目にはマネジメントという形で構築して、3層目はもうすこしやわらかいものでやるとか、重層的な構造の体系をつくることにこそ、制度設計の意味があるんじゃないかと思ひますね。現在は計画的な手続きと手法とボキャブラリーの豊富化とか

というところでだけ議論が為されて、もつと重層的な計画体系とか空間コントロール体系とか、そういうものが考えられないものかと思ひますよ。

西村○性能規定のような考え方もあると思ひますね。あるレベル以上までは地域マネジメントでやつて、あ

るレベルを超えて赤信号が出たら都市計画制度を適用するか。フローティングゾーンを設定することはありうると思うんです。そのためには安定型社会像を深く考えて、今の日本の都市計画の持つている限界（今の都市計画は都市は常に変化するという前提があるわけですが）を考へて議論することが必要ですね。

広原○今の民主党政権がどうなるか。片山元鳥取県知事をよく知つていて、ほくも鳥取地震の時に支援に行つたり、講演をしてもらつたり、ああいう人が首相になったらいいなと思つてた人が総務相になつたんだ

けど、事態が流動的で移行期の段階で制度設計論をやるのは時期尚早じゃないかなと思ひます。むしろこういうコンセプトだったらこんな絵が描けるといふいくつかのシナリオを

イテイングをして、計画制度が成立する社会基盤との関係で制度を論じるほうが有意義だと思ひますけどね。一つの前提で行くのは早いんじゃないかと考へています。

西村○さきほど京都の話で都市にはいくつかのタイプがあるということ

で、そのタイプをきちんと見ること

で大枠も自ずと見えてくると思ひますけどね。その意味で地域に深く入つて、力を養つた上で大枠を見ることをまちづくりをやつている人間は今やらないといけないのかもしれないね。

広原○自分の地域が立脚しているところからどんな発言して、京都型、東京型、九州型といろんな地域からの提案がどんな出てる形になればいいですね。

編集○地域マネジメントが制度として導入されると、各地域社会に結びついた提案を各地がすることになりますね。

広原○その可能性はありますね。

西村○現実にも、先進地域ではあるべきすがたの萌芽が生まれているんだと思ひます。その萌芽をきちんとした形で制度改革の大枠にしていくような肉付けを専門家としてやらなくてははいけないんじゃないかなとおもいます。

編集○結論が出たようです。本日は有り難うございました。